

教員紹介冊子

(2023 年 4 月作成)

法政大学大学院 国際文化研究科

氏 名	栗飯原 文子 教授
こんな研究 をしています	英語圏・仏語圏アフリカの文学、特に小説を中心に研究しています。 そのほか、アフリカの映画や音楽についても学んでいます。
こんな成果 を挙げてい ます	【論文】 「アフリカ文学が紡ぐ「いま」 第 3 回 アフリカをクィア化する／クィア化するアフリカ—— クィアアフリカ文学の波」 『思想』 岩波書店, 2019 年 12 月号. 「アフリカ文学が紡ぐ「いま」 第 2 回 メイド・イン・アフリカの可能性——アフリカの出版の未来」 『思想』 岩波書店, 2019 年 6 月号. 「アフリカ文学が紡ぐ「いま」 第 1 回 アフリカ文学とはなにか ——五〇年後の始まり」 『思想』 岩波書店, 2018 年 10 月号. 「移動をめぐるアフリカの物語」 『思想』 岩波書店, 2017 年 8 月号. 【翻訳】 チゴズィエ・オビオマ『小さきものたちのオーケストラ』 早川書房, 2021 年. チゴズィエ・オビオマ『ぼくらが漁師だったころ』 早川書房, 2017 年. チヌア・アチェベ『崩れゆく絆』 光文社古典新訳文庫, 2013 年.
ほかに、こん なジャンル に関心をも っています	・アフリカのポピュラーカルチャー ・パンアフリカニズムの歴史・思想 ・アフリカ哲学 ・旧植民地世界の文学 ・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(いわゆる第三世界)の連帯の歴史
こんな授業 を行なっ ています	多言語相関論 IA(春)/IB(秋) さまざまな地域・言語圏の文化/文学を読解、分析するための理論と実践方法を学びます。短篇・中篇小説を日本語か日本語訳で精読して議論し、文学批評・理論に触れます。
学会や社会 でこんな活 動をしてい ます	翻訳が好きです。アフリカ(系)の作家による、古典から最新の作品まで、重要なもの、おもしろいものを日本語で紹介できるように頑張りたいと思っています。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	アフリカ大陸(出身)の作家はほとんどみな、二つ以上の言語と文化をまたぎ、大陸内を移動、内外を往来して活躍しています。作品の内容にもそれが色濃く反映されていると言えます。

氏 名	浅川 希洋志 (あさかわ きよし) 教授
こんな研究をしています	1. 最適経験 (optimal experience) といわれるフロー経験 (flow experience) と精神的健康・psychological well-being の関係について。 2. 異なる文化で育った人々はフローを同じように経験するのだろうか。 3. 生理学的指標でフロー経験をどう測定するか、できるのか。
こんな成果を挙げています	1. “Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” (<i>Journal of Happiness Studies</i>, 11, 2010). 2. 「楽しさと最適経験の現象学—フロー理論—」鹿毛雅治編『モチベーションをまなぶ12の理論』金剛出版 (2012年)。 3. “Universal and cultural dimensions of optimal experiences.” (共著: with M. Csikszentmihalyi) (<i>Japanese Psychological Research</i>, 58, 2016). 4. (監訳) チクセントミハイ『クリエイティヴィティーフロー体験と創造性の心理学』世界思想社 (2016年)。 5. 「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』第53巻第2号, 日本精神衛生会 (2022年)。 6. “Dispositional flow and related psychological measures associated with heart rate diurnal rhythm” (共著) (<i>Advanced Biomedical Engineering</i>, 12, 2023).
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文化と心の働きに関する研究: 異なる文化で育った人々は、同じ場面で同じような心の働き方や経験をするだろうか。学校教育は文化の担い手としての子どもたちにどのようなことを期待し、教育プロセスの中で、子どもたちはどのような心の働き方を身につけていくのか。
こんな授業を行なっています	「異文化社会論 IIA/B」: 文化心理学の立場から心の働きと文化の関連について学ぶとともに、異文化社会/多文化社会における適応とはどういうことかを考えていきます。また、受講者が自分自身の異文化体験に対する考察を深めていくための一助となるような授業になればと考えています。
学会や社会でこんな活動をしています	所属学会: 日本心理学会、American Psychological Association、International Positive Psychology Association、European Network for Positive Psychology。 小・中学校の教育研究のサポート、企業内メンタルヘルス・モニタリング・システムの構築、フロー理論を用いた起業家教育プログラムの検証、「ワーケーション」の効果と可能性の検証、フロー経験と心拍数との間にどのような関係があるのかを明らかにする取り組みなど、様々な活動、研究に携わっています。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	中村 哲 (なかむら・てつ) 氏: 1946 年福岡県生まれの医師。国内の病院勤務を経て、1984 年パキスタン北西辺境州、現在のカイバル・パクトUNKワ州の州都ペシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任し治療を始め、そのかわり難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989 年よりアフガニスタン国内へ活動を広げ、山岳地帯医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始、2000 年から干ばつが厳しくなったアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003 年から農村復興のため大がかりな水利事業に携わる。2019 年 12 月 4 日、アフガニスタン・ジャララバードで武装集団に銃撃され、命を落とす。 中村氏は国や文化を越え、医師として、人として、様々な問題を抱えるアフガニスタンで懸命に生きる人々に寄り添い、生きた人物です。「困った人がいたら手を差し伸べる…それは普通のことです」という彼の言葉に、国際社会人の本質があるように思えます。

氏 名	石森 大知 (いしもり だいち) 准教授
こんな研究 をしています	文化人類学、オセアニア地域研究。これまで南太平洋のソロモン諸島で長期間のフィールドワークを行ってきました。主な研究テーマは宗教運動、キリスト教信仰、社会・文化変容、地域開発、民族・宗教紛争などに関することです。また、宗教と公共性の問題や、太平洋における非キリスト教（イスラーム、バハーイー教）への改宗の動きについても興味をもっています。
こんな成果 を挙げてい ます	【著書】 石森大知・黒崎岳大(編) 2023『シリーズ地域研究のすすめ4 ようこそオセアニア世界へ』昭和堂。 石森大知・丹羽典生(編) 2019『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。 石森大知・丹羽典生(編) 2019『太平洋諸島の歴史を知るための60章——日本とのかかわり』明石書店。 【雑誌論文】 石森大知 2019「民族性から土着性へ——ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究』53:1-27。 石森大知 2019「「新しいロトゥ」としてのバハーイー教——ソロモン諸島西アレアレにおける改宗過程と祈りの形式」『南方文化』45:1-18。
ほかに、こ んなジャン ルに関心も っています	最近、関心をもっているテーマは「キリスト教の人類学」です。なかでも、植民地時代にもたらされたキリスト教的な組織や制度などの外面的な装置・配置が、今を生きるソロモン諸島の人々の生活様式や行動規範にどのような影響を与えているのか調査・研究を進めたいと考えています。
こんな授業 を行なっ ています	私は太平洋の島々の研究をしていますが、授業において「太平洋限定」というわけではもちろんありません。異文化、あるいは自己と他者の文化的な差異などに興味をもち、文化人類学のものの見方やフィールドワークに基づく質的調査に関心がある院生を広く指導したいと思っています。授業では基礎知識を補強するとともに、発展、応用可能となるように問題を問かけます。そして個々の関心を深め、多角的な視野から研究テーマを発展させ、共感性を高められるよう指導します。
学会や社会 でこんな活 動をしてい ます	【受賞歴】第7回国際宗教研究所賞、第11回日本オセアニア学会賞を受賞。また、武蔵大学で「学生が選ぶベストティーチャー賞」(2017年)の受賞経験があります。 【委員歴等】2014年～2016年まで、文部科学省研究振興局・学術調査官をつとめ、研究者の立場から、学術研究および科学研究費補助事業の振興のための調査、指導や助言を行いました。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	私の調査地であるソロモン諸島ニュージョージア島の人々は、異なる文化的言語集団間でさまざまな交換を行い、共存してきました。その彼らが話し合う際、クサゲの人はクサゲ語を話し、ホアヴァの人はホアヴァ語を話します。つまり双方ともに自らの言語を発する一方で、他者の言語に耳を傾け理解するのです。その背景として、彼らは自文化に対する誇りと他者に対する敬意をもつとともに、対等な関係や基準を重視することが指摘できます。彼らの間にも軋轢や葛藤は潜在していますが、このような「名もなき人々」の相対主義的な実践は注目に値するでしょう。

氏 名	和泉 順子 （教授）
こんな研究 をしています	情報通信技術は今や社会基盤の一つとして普及発展しています。しかし技術は、時代や社会動向に依存して技術的な開発・設計の方向性が変わり、問題意識や倫理的視点もまた変わります。仮想世界の情報が現実世界に大きな影響を与えるようになった今、情報はどのように保護や制御される必要があるのか、セキュリティや技術標準などの観点から国際社会との連携や協調を含め研究を続けています。
こんな成果 を挙げています	- 和泉 順子, 「エストニアにおける電子政府関連サービスの社会展開に関する調査報告」, 異文化, 2020. - 和泉 順子, 桂田 浩一, 児玉 靖司, 重定 如彦, 滝本 宗宏, 入戸野 健, 山口 和紀 監修, 『情報学基礎』, 培風館, 2020. - 和泉 順子, 櫻井 茂明, 中村 文隆, 『情報システム概論』, サイエンス社, 2018. - 和泉 順子, 「第 20 回 ITS 世界会議参加報告」, 日本ソフトウェア科学会論文誌「コンピュータソフトウェア」, Vol131, No. 2, pp.33-37, 2014. - M. SATO, M. IZUMI, H. ITO, K. UEHARA, J. MURAI, “Criteria for Privacy and Integrity Protection in Probe Vehicle Systems”, the 2011 ITS World Congress, Oct. 2011.
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	インターネット上を流通する情報として情報通信技術の中でも個人情報やプライバシーに関わる保護技術や技術の国際標準の研究に携わっていました。これに関連して、車両の情報化や自動運転にも関わる ITS 分野の研究開発やシステムの普及促進、災害時における道路行政や各種情報流通とその連携や関連法規動向にも関心を持っています。また、エストニアで在外研究を行ったことから、電子政府とそれを支えるデジタル ID などの基盤技術や、その社会展開に関する調査研究にも携わっています。
こんな授業 を行なっています	多文化ネットワーク論 A/B の授業で、知っておくべき計算機科学及びネットワーク技術の用語や基礎を確認します。その上で、関連分野の最新動向技術を紹介しながら、情報科学分野の技術が広く社会で使われるようになるために、どのような準備が必要なのか、何が問題でどのような解決方法が考えられるかを議論します。一方的に提示するのではなく、議論を通じて今何が問題なのか、今後何が必要になるのかを自ら考えるための授業を行ないます。
学会や社会 でこんな活動 をしています	インターネットに関連する産官学の研究プロジェクト (WIDE) に携わっています。また 2018 年にエストニアのタリン工科大学へ在外研究に行くまでの約 10 年間日本ソフトウェア科学会の論文編集委員を務めた他、関連する研究会の実行委員・プログラム委員なども務めていました。経済産業省基準認証研究開発事業「プローブ情報システムの匿名性・セキュリティ評価基準などに関する標準化」など、他大学・組織との共同または委託研究で情報技術の国際標準化にも携わった経緯から、技術の国際標準化にも関心を持ち続けています。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチャルな 人物	たとえば、梅棹忠夫先生。 日本の文化人類学のパイオニアとして知られる梅棹先生は、インターネットという名前も概念もなかった 1960 年代に「情報産業論」を発表し、情報化社会のグランドフレームを提示されています。何に対しても思考停止せず、様々な分野を学び、視点や方法を活かして試行する。そのためには、異なる文化的視点や方法論を知り、多様な知識を今後の可能性も含め自分の思考の糧として柔軟に活かすことが重要だと思います。

氏 名	今泉裕美子 （教授）
こんな研究をしています	・国際関係学（International Studies）の方法論…日本のオリジナルな国際関係研究の歴史（特に、文化や社会をも対象とするもの）を植民政策研究を軸に跡づけ、理解するために、国際関係の歴史的展開と現状を行為体の多様化、キー概念としての「関係性」、「総合のなかの専門性の追究」などから研究。 ・ミクロネシアと日本との関係史、ミクロネシアの地域社会を、アジア及び太平洋島嶼をめぐる国際関係の中で追究。具体的には、①戦前日本の南洋群島統治政策とそこに暮らす人々との関係（移民、戦時動員、引揚げと、引揚げ後の地域社会史との関係）、②太平洋戦争（南洋群島での総力戦の実態や赤道以南のミクロネシアとの関係）と米軍占領（民間収容所や労役などを通じたアメリカの“民主化”・“文化”との出会い）、③委任統治と戦略的信託統治（委任統治の掲げる「文明化」、信託統治の掲げる「自治」「独立」「平和」「安全」）をミクロネシアから検証、④ミクロネシアの戦災からの「復興」、軍事基地化と脱植民地化との関係、⑤南洋群島帰還者の諸活動・戦後ミクロネシアとの「交流」（沖縄、東京を中心とした日本各地）、⑥旧南洋群島を生きた人びとの植民地・戦争経験とその継承、⑦戦後日本の「ミクロネシア協定」から始まる外交関係。
こんな成果を挙げています	・「第六部第六章世界の中の沖縄第二節引揚げたウチナーンチュ」（財沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史（各論編第7巻現代）』 沖縄県教育委員会、2022年。 ・「グローバル化と私たち 12移民 日本のからの移民」歴史学研究会編『「歴史総合」をつむぐー新しい歴史実践へのいざない』東京大学出版会、2022年。 ・「近年の「引揚げ」研究の視点と本書の課題」、「パラオ諸島をめぐる民間人の「引揚げ」」今泉裕美子他編『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016年。 ・「太平洋の「地域」形成と日本—日本の南洋群島統治から考える」李成市他編『岩波講座日本歴史第20巻（地域論）』岩波書店、2014年。 ・「南洋群島研究」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	・旧南洋群島経験を次世代に継承すること、あるいはその意義を、ミクロネシアの研究者、教員などと共同プロジェクトで取り組む（代表）。『沖縄県史』（近代、現代）、『具志川市史』（移民・出稼ぎ編）の執筆、県史、市史スタッフとの調査を通じて、地域社会・市民にとっての「歴史」、「国際関係」とは何かの追究。 ・歌謡、音楽、演劇、絵画、写真、映画、モノ、その他表現にみる「南洋群島」、「ミクロネシア」。
こんな授業を行っています	日本の植民地政策とその下で形成された植民地社会、そこに生きた人々の暮らし、仕事、運動、移動など、また彼らにとってのアジア・太平洋戦争と戦後、脱植民地化の過程を、国際関係学、歴史研究、地域研究の方法論の検討を通じて行う。聞き取り、史・資料調査の方法。
学会や社会でこんな活動をしています	・米国議会図書館南洋庁関係史料の整理・目録作成マイクロフィルム化協力。琉球大学図書館「矢内原忠雄文庫」南洋群島関係史料の整理・目録作成、「矢内原忠雄文庫南洋群島関係資料展」 ・ギャラリートーク「赤松俊子の旅した『南洋群島』」原爆の図丸木美術館・企画展「赤松俊子と南洋群島」（2015年3月28日）。 ・沖縄県立博物館・美術館「美術家たちの「南洋群島」展（2008年11月7日 - 2009年1月18日）の展示検討委員。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	北原きよ子さん。1946年樺太アイヌの両親が、第二次世界大戦後に樺太から引揚げた余市生まれ。元関東ウタリ会会長。幼い頃から抱いた違和感、疑問、怒り、悲しみ一つひとつを出発点に、自ら情報を集め、様々な人と話し、学び、問題の特徴を見極め、異なる文化、階層、アイヌ問題に無自覚・無知の人々に向き合い、アイヌが伝統的な方法とする話し合いを通じて問題に取り組む。中曽根元首相の「日本は単一民族国家」発言に批判の声をあげるなどアイヌの権利回復、アイヌの伝統文化の復元を通じて、日本、世界の植民地主義の克服によって真の「インターカルチュラルリティ」が実現できること、を提示してきた。著作に『わが心のカツラの木ー滅びゆくアイヌといわれて』（岩波書店、2013）。

氏 名	大嶋 良明 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究 をしています	現代のネット社会はどうなるのか、インターネットが我々をどのように変えるのか、これはテクノロジーのみの問題ではなく、広く人間の知的な営みに関わる問題であり文化の問題です。ネット社会＝多文化情報空間の特性や問題点を情報学の立場から学んで行きます。特にネット社会でのより良い自己実現を目指して、メディアリテラシー教育、eLearning や ePortfolio 等の教育工学的手法の研究に関心があります。最近の研究関心はテキストマイニングなど機械学習の手法を用いてインターネット上のビッグデータを分析することです。また大学院時代の研究テーマも大事にしており音響処理とミュージコロジーの観点からコンピュータ音楽、電子楽器についても継続的に研究をしています。
こんな成果 を挙げています	大嶋良明,「われわれにとって情報とは何か?」,『異文化別冊:国際文化情報学とは一その可能性と課題』,2010,通巻第1号,pp.18-31. 大嶋良明,「夏期 SA における文化情報フィールドワークについて」,『異文化別冊:国際文化情報学とは一その可能性と課題』,2010,通巻第1号,pp.201-210. 大嶋良明,「学部の情報教育についてーこれまでの歩みー」,2010,『異文化.論文編』,第11号,pp.73-85. 大嶋良明,「学部初年次教育における授業改善の試み-ICT と ePortfolio を中心として」,『法政大学教育研究』,2014,第6号,pp.65-82. 大嶋良明,「学部科目への ePortfolio の活用について:立ち上がりの実施報告」,2014,『異文化.論文編』,第15号,pp.137-153. 以下は学会発表 大嶋良明,佐々木健太,田中勇太,「Mahara を活用した学部教育の取組みー法政大学国際文化学部の事例報告ー」,Mahara Open Forum 2013. 佐々木健太,大嶋良明「紙資料の効率的仕分け機能を実装した Moodle と Mahara の連携」,2013, Mahara Open Forum 2013. 大嶋良明,田中勇太,「学部教育における e ポートフォリオ Mahara 活用の継続的取組み」,2014, Mahara Open Forum 2014. 大嶋良明,「Hammond B3 の発音原理のモデル化の試み」,2018, ADADA Japan 2018.
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	● 情報学(インターネット,情報メディア論) ● 教育工学(特に ePortfolio , eLearning) ● 電気・計測機工学(信号とシステム,通信,データサイエンス,確率過程,機械学習) ● 音声言語情報処理(音声認識,音響モデル,言語モデル,対話システム,ロボストネス) ● デジタル信号処理(特にコンピュータ音楽,音響,マルチメディア) ● 応用言語学(異文化コミュニケーション)
こんな授業 を行なっています	現代社会をメディアとしての諸特性において分析することを目指しています。 【多文化情報メディア論 I Aーソーシャルメディアの調査と分析】 Twitter, ブログ, Web などインターネットの書き込みをデータサイエンスで分析します。同時にイメージ,映像などのメディア情報の分析手法やモデル化を学び,実際のデータに適用して分析します。 【多文化情報メディア論 I Bー行動データから知る人間社会と心理】 現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ,文化情報学的なアプローチで分析するなかから,異文化理解に資する視点の開拓を試み,インターネット上のユーザの行動の分析から人間社会と心理について何が解明できるのかを学びます。
学会や社会 でこんな活動 をしています	法政大学市ヶ谷情報センター長 (2006-2007) 法政大学グローバル人材育成推進事業 ePortfolio プロジェクトリーダー (2013.9-2015.3) 法政大学 FD 推進センター調査プロジェクトリーダー (2012-2014) 法政大学教育開発支援機構 ICT 教育プロジェクト委員 (2011-2012, 2013-) 以前の研究内容です Y. Ohshima, "Environmental Robustness in Speech Recognition Using Physiologically-Motivated Signal Processing", Ph.D thesis, Carnegie-Mellon University (1993).
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチャル な人物	難しすぎて答えられません。「多文化的」という用語も「インターカルチャル」という用語も難しいです。強いていうならば「このような性急な問いかけに素朴な疑問を抱くことができる人」ではないでしょうか。

氏 名	大中 一彌 (教授)
こんな研究 をしています	【学問分野】政治学、政治思想 【地域】フランス語圏 【キーワード】ヨーロッパ、文化史、社会科学、認識論 【関心】言語や文化のはざまにいる人たちや、そこから生み出されるものに関心があります。
こんな成果 を挙げています	・「マージナル・マン論再考」『異文化』23号、2022年。 ・「黄色いベスト運動 — あるいは21世紀における多数派の民衆と政治」『対抗言論』法政大学出版局、2019年、254-289頁。 ・杉田孝夫・中村孝文編『市民社会』第八章 現代フランスの「スカーフ問題」における市民社会と国家 199-222頁 おうふう 2016年。 ・「移民社会の論じ方 — ジェラルール・ノワリエルにおける記憶と歴史 —」『思想』 岩波書店 1096, 171-187頁 2015年。 ・『フランスという坩堝』 ジェラルール・ノワリエル 法政大学出版局 2015年（翻訳）
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	・フランス17世紀におけるいわゆる「古典主義」と、20世紀における「現代思想」のつながり
こんな授業 を行なっています	国際文化研究科「多言語社会論A」と「多言語社会論B」を担当しています。 2023年度は、《青》という色を軸に据えつつ、ヨーロッパ地域の多様な文化や、その背景について学んでいきます。青い髪 #bluehair から話をはじめる予定です。 授業のテーマを紹介するショート動画（それぞれ約6秒） 多言語社会論A https://youtube.com/shorts/8jK2B1pRnI0 多言語社会論B https://youtube.com/shorts/Gzf8Ht3CVNo ・上記の授業内容にかんし、手軽に読める入門書として、 ガイ・ドイッチャー『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』椋田直子訳、ハヤカワ文庫、2022年、があります。 ・問い合わせや各種相談は、次のGoogleフォームからお願いします： https://forms.gle/RtmecXvRUdyQyQnc6
学会や社会 でこんな活動 をしています	・法政大学出版局の理事長を現在つとめ、学術出版の困難さと意義を感じています。 ・2015年にパリ日本文化会館の招聘で客員教授を務めました。コロナ禍をへて、得難い体験だったとあらためて感じています。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	ボアソナード博士： 青年時代、ヨーロッパにおける1848年の一連の革命の世代の影響を受け、「ユートピアン」的な精神や、「人道的」信条を抱くに至ったとされる。のちに欧化政策の下にあったとはいえ、およそ歴史的文脈が異なる日本で、法典編纂（へんさん）の事業や外交顧問の役割に取り組んだ。成果を挙げたが、挫折も経験している。

氏 名	大野ロベルト 准教授
こんな研究 をしています	古典を中心とする文学の研究をとおして、日本の言葉や文化がどのような仕組みを持ち、どのように発展してきたのかを考えています。また、近現代における古典文学の受容や、翻訳による海外への越境などについても研究しています。
こんな成果 を挙げています	・「英語圏における『土佐日記』受容史の概略(戦前編)」『異文化』23号、2022年、153-185頁。 ・『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021年。 ・「『土佐日記』英訳ことはじめ」『日本研究』62号、2021年、69-91頁。 ・“Circle within Walls: A Comparative Study on Poets of Leprosariums,” in <i>Recent Scholarship on Japan: Classical to Contemporary</i>, Cambridge Scholars Publishing, 2020, pp. 57-74. ・『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019年。 ・“À la maison de Shibusawa: the Draconian Aspects of Hijikata's Butoh,” in <i>The Routledge Companion to Butoh Performance</i>, Routledge, 2018, pp. 71-77.
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	文学理論を援用してテキストを分析することを続けて来たため、様々な表現や文化の事象を幅広く、理論的に検討することに関心があります。 文学に関しては古典だけでなく、明治期から昭和期までの近代文学はもちろん、フランス文学やドイツ文学にも親しんで来ましたので、世界における日本文学の位置というものにも関心があります。 また、文学と権力(例えばハンセン病文学など)、言葉と身体(能や舞踏など)といったテーマについても興味を持ち、研究しています。
こんな授業 を行なっています	「多言語相関論 IIA・B」 パロディという汎用性の高い概念を介して日本文化の特徴を抽出したうえで、それを異なる時代や文化の場合と比較検討するというプロセスをとおして、論理的に思考する技術を身につけます。 パロディは言うまでもなく笑いとは結びついており、研究という堅いものとは対照的なイメージがありますが、おそらく笑いは人間にゆるされた最も高度な行為の一つです。笑いについて考えることは、人間について考えることなのです。
学会や社会 でこんな活動 をしています	求めに応じて、展示や番組づくりに協力しています。例えば、紀貫之をとりあげたNHK「知恵泉」では、講師役として出演もしました。 また、翻訳研究の実践として、大野露井という筆名で海外の文芸作品を翻訳紹介しています。業績にチェンティグローリア公爵『僕は美しいひとを食べた』（彩流社、2022）、サックス『魔宴』（彩流社、2020）、フェルサン『リリアン卿』（国書刊行会、2016）などがあります。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	専門の観点からも、ぜひ紀貫之を挙げたいと思います。大陸の文学である漢詩を消化しながら、日本独自の表現の地平を切り拓いた貫之のような歌人たちの活躍がなければ、現代の私たちの言葉や世界観はまるで違うものになっていたはずです。結局のところ、文化を守り育てることができるのは、異文化に心を開くことのできる人々なのです。

氏 名	レティツィア・グアリーニ（専任講師）
こんな研究 をしています	日本現代文学における家族、とりわけ父親像や父娘関係を研究しています。 また、文学における妊娠・出産・育児、女同士の友愛関係、フェミニズム運動と文学の関係など、さまざまなテーマに焦点を当てながらジェンダーの視点から文学を研究しています。
こんな成果 を挙げています	1. “Voices Against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda,” <i>Voiced and Voiceless in Asia</i>, Palacký University Olomouc, 2022, pp. 456-486. 2. “Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko’s <i>Divine Maiden</i>,” <i>Japanese Studies</i> vol. 42 no. 3, 2022, pp. 339-353. 3. 「娘は父の支配から逃れられるのか？—角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第23号、2021年、55-79頁。 4. “Mothers Who Kill: Motherhood and Loneliness in <i>Mori ni nemuru sakana</i> and <i>Saka no tochū no ie</i> by Kakuta Mitsuyo,” <i>Il Giappone. Studi e Ricerche</i> vol. 1, 2020, pp. 85-110. 5. “A Utopian Trip to the Country of Amanon: An Analysis of the Father/Daughter Relationship in Kurahashi Yumiko’s <i>Amanonkoku ōkanki</i>,” <i>Orientalia Parthenopea</i> vol. 19, 2019, pp. 165-184.
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	文学はもちろん、映画、漫画、アニメ、ドラマ、CMなど、幅広くメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象を分析することに関心があります。 また、日本、そして世界各国における家族の形の多様化や性役割に関する社会的規範への違和感を語る声にも興味を持って研究しています。
こんな授業 を行なっています	「多文化相関論 IA・B」 ジェンダー理論やクィア理論の視点から文化について考える授業を行います。また、現代社会における〈みる／みられる〉の関係性について考察しながら、文学作品、映像作品、SNSなどにおける視線と権力を分析する授業を行います。
学会や社会 でこんな活動 をしています	ジェンダー・セクシュアリティ研究についてのイベントを企画・運営しています。 今までジェンダーと写真に関するイベント、翻訳に関するイベント、また映画上映会などを開催してきました。 また、イタリア語で日本の文芸作品を紹介して、翻訳しています。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	

氏 名	熊田泰章 (<u>教授</u> 、准教授、専任講師)
こんな研究 をしています	「テクスチュアリティ研究」が専門です。ここのところ書いている論文では、「間文化性＝インターカルチュラリティ」という新しい概念について研究しています。「主体」が他者との関係性の中に構築されるように、「文化」も、実体的に存立しているのではなく、関係的に構築されるものです。「文化」の仕組みをこのように定めることによって、排他的になることと無縁に「個々の文化の独自性」を主張できると考えています。
こんな成果 を挙げています	1. 「図像の働き；非在と在：言葉と図像のナラトロジーを考察する」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第23号、2022年 2. 「世界理解の表出としての言語テキストと図像テキストーボッシュとゴヤの絵画を例としてー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第17号、2016年 3. 「グローバリゼーションの原理としての記号的従属および動的編成と相互変容ー個人と文化の相互的生成と変容についての一考察ー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第16号、2015年 4. 「唯一であることの相対的価値についての試論ー芸術作品における内在性と行為性ー」法政大学国際文化学部紀要『異文化』第15号、2014年 5. 「絵画のナラトロジー試論ー知ることと見ることと語ることの本来的役割同一性についての一考察ー」熊田泰章編『国際文化研究への道ー共生と連帯を求めて』彩流社、2013年
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	自分の研究史として挙げれば、以下のことについて考察してきました、また、継続しています。 1. ヨーロッパ昔話の構造研究・分類研究 / 2. 小説の語りの構造・ナラトロジー / 3. 読者論 / 4. 翻訳論 / 5. 文化記号論
こんな授業 を行なっています	「個」がいかにして存在するに至ったか、また「個」がいかにして表象されるに至ったかについて考察することを通して、「間主観性」「間テキスト性」「間文化性」という概念をつきつめていくことを課題としています。修士課程の授業では、目下のところ、肖像画を取り上げて、トドロフの著作を精読し、加えて、ベームの著作を合わせて読むことで、語ることと図像で描くことの対比を行うことに取り組んでいます。 ツヴェタン・トドロフ『個の礼賛 ルネサンス期フランドルの肖像画』岡田温司・大塚直子訳、白水社、2002年 ゴットフリート・ベーム『図像の哲学 いかにイメージは意味をつくるか』塩川千夏・村井則夫訳、法政大学出版局、2017年
学会や社会 でこんな活動 をしています	日本全国の大学の国際文化学部・国際文化研究科等の教員・大学院生が会員となっている日本国際文化学会で2期にわたり会長を務めました。日本国際文化学会は、大学院生の発表を奨励しています。法政大学では、副学長・常務理事・グローバル教育センター長として、国際交流・大学院運営を担当する職務にあたりました。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	Max Lüthi (1909年3月11日 - 1991年6月20日) : ヨーロッパ口承文芸を、個別研究としてではなく、間文化的に共有されるものとして研究した。 Lutz Röhrich (1922年10月9日 - 2006年12月29日) : 口承文芸から現在の文学への広範な相関関係について多くの示唆を得ることのできる研究を行った。私自身、学部卒論に関し、フライブルク大学で研究指導を受けました。

氏 名	興石 哲哉（教授）
こんな研究 をしています	・英語形態論（英語の語を中心とした領域．形態論が絡む音韻現象，形態現象，言語史なども含む）．英語音声学・音韻論．英語辞書学（英語辞書の歴史，比較等）．日本語との対照研究（書記体系，語彙構造等）． 私の場合，一つの事象を理論的に突き詰め深化させていくタイプの研究ではなく，さまざまな事象を記述し，一見無関係に思われることを関係づけ，新たな光を当てていくタイプの研究になることが多いです．
こんな成果 を挙げてい ます	・『コンパスローズ英和辞典』（赤須薫監修・編集）文法解説を執筆．2018 年，研究社より出版． ・『歴史言語学』（服部義弘・児馬修編集）第 6 章「形態変化・語彙の変遷」2018 年朝倉書店より出版． ・‘Two Types of Adjectives and the History of English Word Formation.’（単著，論文）2012 年『歴史言語学』（<i>Historical Linguistics in Japan</i>）第 1 号 23-38 頁掲載． ・<i>Collateral Adjectives and Related Issues</i>．（単著，書籍）2011 年，Peter Lang (Bern, Switzerland) より出版．
ほかに、こん なジャンル に関心をも っています	・英語が絡む事象全て．言語間の比較・対照研究全般．英語での作文指導，論文作成指導．インターネットを利用した英語の新しい学習法．時事英語．英語圏・欧州の言語・文化と歴史．
こんな授業 を行なってい ます	学部授業では，ヴィジュアルを用いたプレゼン形式を採用しています．さらに授業支援システムによる事前・事後の情報提供等を行い，学生が理解を深められるよう心がけています．大学院の授業では，学生の知識・興味等がさまざまなため，学生との話し合いをベースに授業の形式・進め方等を決めていきます．英語学，言語学の知識のない学生でも理解できるように，十分な例を挙げながら 解説し，一見とっつきにくい方法論をできるだけ早く習得できるように努めています．また，英語や文化についても理解を深められるように指導しています．
学会や社会 でこんな活 動をしています	かつて 3 年経過，5 年経過等の中高英語教員の研修講師を務め，辞書指導等を指導しました．2012 年，2015 年には <i>Journal of Linguistics, Word Structure</i> の論文審査員を務めました．英米の大学院で 10 年余り研究生活を送った経験から，英語圏留学全般についてのコンサルティングや，海外の大学等との交流事業の企画・推進も行ってきました．また 30 回を超えて往き来をしているスコットランドの歴史・文化の紹介やその普及にも努めています．
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	・Geoffrey Pullum. 1945 年生まれ．彼はロック・ミュージシャンでしたが，その生活に嫌気が差し，23 歳でヨーク大学に入学し，その後，有数の言語学者になりました．ある時，Edinburgh の科学系のワークショップで日本人の優秀な学者のワークショップに出たところ，訛りがひどく一言も分からなかったそうです．彼曰く，「アラブとユダヤが仲直りすることは僕らの人生中にはまずないだろうけど，これを何とかしてあげるのは僕らの仕事の一つだよな？」！彼のディベートはいつも面白く必見です．https://www.youtube.com/watch?v=mMNFyhuqyNQ（一例です）．なかなかの曲者ですが（笑），いつもすごいなと思うのです．

氏 名	佐々木 一恵 教授
こんな研究をしています	19 世紀末から 20 世紀初頭の米国聖公会におけるアングロ・カトリシズム（イギリス国教会においてカトリック的要素の復興を唱えた神学）の興隆から、米国の革新主義運動を捉えなおす研究をしています。とりわけ、ジェンダー・セクシュアリティとアングロ・カトリシズムの興隆の関係に注目し、「生」（感情体制から生・政治に至る）の避難所としての宗教（アングロ・カトリシズム）と社会運動の連関性について検討しています。
こんな成果を挙げています	（著書・単著） ● <i>Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century</i> (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016). （論文） ● 「『神に奉獻した生』とプロテスタントの女性主体：19 世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から」『異文化』24 号、2023 年。 ● 「善き生の回復を求めてーラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力」『年報アメリカ研究』56 号、2022 年。 ● 「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神ーアングロ・カトリシズムの視点から見る生政治ー」『異文化』23 号、2022 年。 ● 「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動 ―生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16 号、2020 年。 ● 「『第三者』性のポリティクスー19 世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編」『アメリカ史研究』42 号、2019 年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	19 世紀後半から 20 世紀前半のアメリカ合衆国の思想史・宗教史・ジェンダー史
こんな授業を行なっています	● 「多文化相関論 III（歴史学の諸アプローチ） 歴史学の諸潮流について文献講読を中心に議論を行なっています。 ● 「ジェンダー論（ジェンダー史の展開）」 ジェンダー史（特にアメリカ史）について文献講読を中心にして議論を行なっています。
学会や社会でこんな活動をしています	● アメリカ学会の英文ジャーナル編集委員 ● Cornell University Press の査読委員 ● The Journal of Pacific History の査読委員

氏 名	佐藤 千登勢 教授
こんな研究 をしています	20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド芸術を専門としています。とりわけ、ロシア・フォルマリストの芸術理論、文学作品、映画作品を中心に論文や本をまとめてきました。現在は、ロシア(旧ソ連諸国を含む)、中・東欧諸国の映画を中心に作品分析を行っています。
こんな成果 を挙げています	・『DVD で愉しむロシアの映画』(東洋書店／ユーラシアブックレット、2005) ・『シクロフスキイ 規範の破壊者』(南雲堂フェニックス、2006) ・『映画に学ぶロシア語:台詞のある風景』(東洋書店、2009) (・『映画に学ぶロシア語』増補改訂版、教育評論社、[予定]) ・『チェブラーシカ』(東洋書店／ユーラシアブックレット、2010) ・「幾何学的フォルムの可能性:ヴィクトル・シクロフスキイの場合」、貝澤哉、野中進、中村唯史 編著 『再考 ロシア・フォルマリズム』所収 (せりか書房、2012) ・「良心の旋律:ムステイスラフ・ロストロポーヴィチ」、法政大学国際文化学部編『国境を超えるヒューマニズム』所収(法政大学出版局、2013) ・「ロシア・東欧の映画人」17 項目の概説、『岩波世界人名大辞典』二分冊(岩波書店、2013) ・「文芸映画」の項目概説、『ロシア文化事典』(丸善出版株式会社、2019) ・「映画『貴族の巣』に刻まれたウサーヂバ表象の一断面」(研究成果報告書『近代ロシア文学現出の舞台:ロシア文学史における貴族屋敷(ウサーヂバ)の意義』:研究代表者 坂内徳明、一橋大学、2022) ・翻訳:タチヤナ・コトヴィチ『ロシア・アヴァンギャルド小百科』桑野隆 監訳(水声社、2008) のうち「アヴァンギャルド」「形式主義学派」「未来主義」など 51 項目
ほかに、こんな ジャンルに関 心をもってい ます	・映画学 ・映像分析 ・文学作品分析 ・抑圧と被抑圧の諸相
こんな授業 を行なってい ます	「多文化芸術論Ⅰ」にて、旧ソ連諸国・ロシア、チェコ、ポーランド、ハンガリーの映画作品を対象として、国家のイデオロギーと芸術の関係について、また芸術の審美的要素について概観し、院生のみなさんと作品の一部を鑑賞しながら意見を交換する授業を行なっています。翌週までに、議論点や自身の見解を簡潔にまとめたリアクションペーパーを提出してもらいます。
学会や社会 でこんな活 動をしています	・日本ロシア文学会の倫理委員会委員長を務めています。 ・慶應義塾大学通信教育部教科書『ロシア文学』金田一真澄 編著(2007 初版第1刷)の分担執筆。 ・『ロシア NIS 調査月報』(一般社団法人ロシア NIS 貿易会発行)にロシア映画のコラムを連載していました(2014 年 12 月号～2020 年 8 月号)。 ・放送大学東京多摩学習センターにてロシア映画の面接講義を行っています。

氏 名	重定 如彦 (教授)
こんな研究 をしています	ユビキタスコンピューティング。 最近は人工知能にも興味を持っています。
こんな成果 を挙げてい ます	「不完全情報ゲームにおけるメタ節点・メタ行動を用いた ゲーム木構築手法, BMI 命令等を用いた高速化手法」 コンピュータソフトウェア 36 巻第 1 号 p.119-151, 2019, 日本ソフトウェア学会 「Interoperable Spatial Information Model and Design Environment Based on ucR Technology」 IEICE Transactions on Information and Systems, 2013 『実習情報リテラシ 第 3 版』サイエンス社, 2020 『情報学基礎』培風館, 2020 『学生のための JavaScript』東京電気大学出版局, 2022
ほかに、こん なジャンル に関心をも っています	コンピュータのプログラミングによるものづくりにも関心を持っています。 最近では、人工知能を使ったプログラミングなどをテーマにした授業も行っています。
こんな授業 を行なってい ます	現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスな どのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識 するディープラーニングを用いた AIなどを題材とした実習を行いながらそ の仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解でき るようにする。また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。
学会や社会 でこんな活 動をしています	アジアの諸国を対象とした留学生の奨学金の選考委員を行っています。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	

氏 名	曾 士才 (教授)
こんな研究 をしています	中国における少数民族および日本における中国系移民・華僑華人を二本柱にして、エスニック・マイノリティに関する文化人類学的研究を行っています。特に、民族文化（宗教、儀礼、慣習、言語など）が、年中行事や教育、観光などを通して具体的にどのように自己表象または他者表象されるのかを分析し、民族意識、国家（ホスト社会）と民族集団との関係を歴史的、社会的に考察し、最終的には民族間の共生の実現に関心を持っています。
こんな成果 を挙げています	○『日本華僑の歴史と文化―地域の視点から』（共編著）明石書店 2020 年 ○「聖なる時空の現出とその観光資源化」長谷川清・河合洋尚編『資源化される「歴史」―中国南部諸民族の分析から』風響社 2019 年 ○「戦中・戦後における神戸華僑の体験―華僑学校の教職員の事例」『異文化（論文編）』第 19 号（法政大学国際文化学部）2018 年 ○「日本残留中国人―札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究―国際関係と地域の視点から』日本経済評論社 2016 年 ○「中国貴州省における生態博物館の二〇年」塚田誠之編『民族文化資源とポリテイクス―中国南部地域の分析から』風響社 2016 年 ○『落地生根―神戸華僑と神阪中華会館の百年（増補版）』（共著）研文出版 2013 年
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	・東アジア比較民俗学（衣食住、信仰、習俗、説話など） ・アジア系移民の比較 ・現代中国の社会と文化
こんな授業 を行なっています	わたし自身は文化人類学的、民俗学的手法で研究していますが、理論的アプローチよりも、フィールドワークに基づいた、実証的な研究を行っています。授業では、研究史を押さえながら、優れたモノグラフを読むなかで、一緒に考え、議論を深めます。
学会や社会 でこんな活動 をしています	1981 年に創設したインターカレッジな研究会・仙人の会の発足時からのメンバーとして、月例会の運営に関わっています。この会は東アジア、東南アジア大陸部に関心のある教員、学生が集い、議論し、切磋琢磨する場になっており、月例会での発表は若手研究者にとってはいわば登竜門になっています。 また、日本華僑華人学会の常任理事（2003 年～19 年）、会長（2014・15 年）、監事（2020～23 年）を務めており、研究会、講演会など学会の諸活動を通じて、華僑華人研究の充実とネットワークの拡大を図っています（仙人の会、日本華僑華人学会ともに HP あり）。20 年～22 年は観光学術学会の評議員も務めていました。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチャル な人物	箕作 麟祥（みつくり りんしょう、1846 年 - 1897 年）。幕末から明治時代の日本の幕臣・官僚、洋学者、法学者。和仏法律学校（現・法政大学）初代校長。彼が現代世界史について著した『万国新史』玉山堂 1871 年は、欧州大陸の歴史をナショナル・ヒストリーとしてではなく、大陸全体の動きとして相互関係においてとらえており、インターカルチャルに物事を見る目を持った先駆的な人物。

氏 名	高柳 俊男 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究をしています	専門は朝鮮近現代史で、日本との関係を中心に研究しています。激動の歴史のなかで、人々が海峡を越えてお互いをどう認識し、移動や交流・摩擦を繰り返してきたのか、その過程全般を守備範囲としています。 なかでもとくに、日本に渡ってきた人々（在日朝鮮人：総称）の経てきた歴史や、そのなかで培われた文化、そして日本人・日本社会との関係について重点的に研究しています。従来見落とされてきたものの、本来大事と思われる埋もれた事実や資料の掘り起こしにも力を注いでいます。
こんな成果を挙げています	・「映画『海を渡る友情』と北朝鮮帰国事業」（『在日朝鮮人運動史研究』第29号・第30号連載、1999年・2000年） ・「渡日初期の尹学準－密航・法政大学・帰国事業」（『異文化』第5号、2004年） ・「中西伊之助－支配民族と被支配民族間の溝を乗り越える」（鈴木靖／法政大学国際文化学部編『国境を越えるヒューマニズム』、法政大学出版局、2013年） ・「留学生を主対象とする国内研修実現への歩み－法政大学国際文化学部の教育実践の記録として」（熊田泰章編『国際文化研究への道』、彩流社、2013年） ・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために－国際系学部の事前学習授業の実際から」（学輪 IIDA 機関誌『学輪』、第2号、2016年） ・「日本人と在日朝鮮人の『連帯』に関するささやかな模索」（『抗路』第10号、2022年12月）
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	韓国・朝鮮関係なら、広く興味があります。ほかに、満州移民をはじめとする東アジアの民族問題や、多文化共生に向けた日本社会の動向全般にも関心があります。研究のスタイルとして、文字資料を使用するのは当然ですが、映像資料の収集・活用や、体験者からの聞き取りにも力を注いでいます。また、イメージをふくらませるため、なるべく現地を訪れ、「足で稼ぐ」ことをモットーとしています。一例として、「歩いて知る東京の中の『朝鮮』」というフィールドワークを、1990年以来毎年実施しています。 近年は、学部の SJ (Study Japan) 国内研修の担当者として、研修地の長野県南部やその周辺地域の調査研究や、大学史委員会や自校教育に携わる者として、法政大学史の解明にも取り組んでいます。
こんな授業を行っています	どんな学問をやるにしても、その学問が形成されてきた時代への考察は欠かせません。春学期は、特定の個人の伝記的著作物を媒介に、戦前ないし戦後日本における時代潮流や社会運動を、とくにアジアとのかかわりの中で追う授業を行っており、これまで鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子などを取り上げてきました。（「多民族共生論ⅡA」） 秋学期は、在日朝鮮人を軸とした日本の多民族共生がテーマです。一昨年度からは、私自身がこれまで書いてきた文章を俎上に載せています。（「多民族共生論ⅡB」）
学会や社会でこんな活動をしています	大学1年生のとき、NHKに朝鮮語講座開設を要望する署名運動が起こり、そこに集まった人たちで読書会を作りました。それ以来45年、私のところを事務局に「鐘声の会」として読書会活動を続け、ミニコミ誌『鐘声通信』を月刊で500号あまり発行しています。目標としてきた柏木義円の『上毛教界月報』全459号は数年前、無事突破しました。どこまで続くか不明ですが、「継続は力なり」で頑張っています。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	中学の理科教師だった梶井陟（1927～88年）は、戦後の一時期存在した東京都立朝鮮人学校に赴任。ハングルで書かれた生徒の名簿が読めなかったことから朝鮮語を猛勉強して、最後は富山大学の朝鮮語・朝鮮文化コースの主任教授になりました。こうした人物も、マルチカルチュラルでインターカルチュラルな人物に思います。

氏 名	廣松 勲（ひろまつ いさお）准教授
こんな研究 をしています	①フランコフォニー文学研究（カリブ海域諸島とカナダ・ケベック州） ②地域研究（同上）
こんな成果 を挙げてい ます	①評論：「『たかが世界の終わり』における映像技法：ケベック映画としての／からの出立」『ユリイカ』特集「グザヴィエ・ドラン」，2020年4月号，青土社，2020年，頁数未定。 ②共訳：ピエール・ヌヴー，「ケベックと北米大陸のフランコフォニー（ニューイングランド、アカディア、フランス語圏オンタリオ）」（廣松勲・小松祐子共訳），『ケベック研究』第10号，日本ケベック学会，2018年，93－108頁。 ③評論：「第5章 エドゥアール・グリッサン（1928－2011）：〈関係〉の詩学から全－世界へ」，『国際社会人叢書2：〈境界〉を生きる思想家たち』，榎木玲子／法政大学国際文化学部編，法政大学出版局，2016年，105－129頁。 ④論文：「現代ケベック文学の諸潮流：移民文学と新郷土文学を中心に」，『Nord-Est』第7・8号合併号，日本フランス語フランス文学会東北支部会，2015年，84－105頁。 ⑤編集・翻訳・エッセイ・書評：日本フランス語圏文学研究会会報『Archipels francophones : bulletin du Cercle d'études japonaises des lettres francophones』第5号の編集／巻頭エッセイおよびインタビューの翻訳／エッセイ・書評の執筆，2015年8月4日。 ⑥論文：《Esprit d'avant-garde dans les romans de Raphael Confiant》，dans <i>Experience de l'extreme, la culture et l'art d'entre-deux guerres</i> (Actes du colloque international d'automne 2014), CFAF, 2014, pp. 177-191. ⑦評論：「文学研究における社会」，『総合政策学のための思想研究』第1号，慶應義塾大学総合政策学部・堀茂樹研究会，2013年，24－29頁。 ⑧評論：「文化都市モントリオールにおける現代ハイチ文学」，『遠くて近いケベック：日ケ40年の対話とその未来』（小畑精和・立花英裕編著），御茶の水書房，2013年，275－277頁。 ⑨論文：「パトリック・シャモワゾーにおけるトランスカルチャー：記憶の伝達から伝達の記憶へ」，『Nord-Est』第6号，日本フランス語フランス文学会東北支部，2013年，78－96頁。 ⑩博士論文：《Melancolie postcoloniale : relecture de la memoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Emile Ollivier et Patrick Chamoiseau》，these doctorale presentee a l'Universite de Montreal, Directrice : Lise Gauvin, 2012. *その他：発表、書評、講演会司会・通訳・報告書作成、対談、コミュニティ誌記事など多数。
ほかに、こ んなジャン ルに関心も っています	①ホラー映画，ドキュメンタリー映画（特にフェイク・ドキュメンタリー）における物語・語りの構造 ②実話系怪談小説における物語・語りの構造
こんな授業 を行なっ ています	①2022年度秋学期：「多言語芸術論II」（フランコフォニー文学入門）
学会や社会 でこんな活 動をしてい ます	【受賞歴】①日本学術振興会特別研究員PD（2012年～2014年）／②エミール・オリヴィエ奨学金（2011年，モントリオール大学）／③学会奨励賞（2011年，フランス語フランス文学会） 【所属学会・役職】①日本フランス語教育学会：初中等教育委員／②日本ケベック学会：副会長（2018年～），編集委員長（2016年～2020年）／③日本フランス語フランス文学会／④日本フランス語圏文学研究会／⑤国際フランス語圏研究会議（CIEF） 【その他の活動など】①集中講義（2018年，東北大学）／②「第10回 フランコフォニーを発見しよう」管理運営（2018年，法政大学）／③「北米文化論（ケベック講座）」の開講・管理運営（2018年度～）／④「東日本および西日本高校生フランス語暗唱コンクール」の課題テキスト選定（2013年度～）
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	エドゥアール・グリッサン：マルティニック系作家。複数の文化圏に跨りながら、独自の世界観に基づいた詩学を作り上げた。 ダニー・ラフェリエール：ハイチ系ケベック人作家。文化的所属という自明の事柄を問題に付し、文化横断的な自己像を物語にし続けている。 ファビエンヌ・カノール：マルティニック系作家。文化の境界にあることを、フェミニズムを中心とした交差性から考え、物語を書き続けている。

氏 名	松本 悟 教授
こんな研究 をしています	・開発援助の制度、効果、影響（国際組織、日本政府、NGO、新興ドナー） ・調査の機能（特に環境・社会影響評価） ・メコン河流域の地域研究 ・開発と環境（自然・社会環境）
こんな成果 を挙げてい ます	▼単著 『調査と権力』東京大学出版会、2014 年。 『メコン河開発』築地書館、1997 年。 ▼編著（主編者） 『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021 年。 『NGO から見た世界銀行—市民社会と国際機構のはざま』ミネルヴァ書房、2013 年。 ▼単著論文（査読付） 「中止された環境事業の 15 年—タイ・サムットプラカン汚水処理事業がもたらしたものの」『環境と公害』49/3、岩波書店、2020 年、61-67 頁。 「開発協力における調査・権力・倫理性—世界銀行の「調査の失敗」と異なる知の共犯関係—」『国際開発研究』24/2、2015 年、35-50 頁。
ほかに、こん なジャンル に関心をも っています	上記研究分野以外に、貧困、紛争、資源、森林に関する研究であれば、大学院での指導が可能。研究方法としては、院生の研究目的に沿って、インタビューや文献を研究資料とする質的調査の指導を行う。統計データやアンケートに基づく量的調査については、主指導教員は難しいが助言であれば可能。
こんな授業 を行なって います	国際協力の概念やアクター（国際機構、NGO）の役割、開発援助の社会・文化的側面、新興ドナー（中国、韓国、タイなど）、開発や開発援助が少数民族に及ぼす影響について学ぶ。毎回文献を指定し、受講生が分担して講読・発表し、教員が補足的な講義を行う。なお、履修する院生の関心をふまえて、授業内容や使用する文献を柔軟に変更する方針である。
学会や社会 でこんな活 動をしています	NHK 報道記者（1987-92）、日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所代表等（1992-96、ラオス労働勲章）、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ代表理事等（1999-）、国際環境 NGO FoE Japan 顧問（2009-）、アジア太平洋資料センター理事等（2010-）、外務省開発協力適正会議委員（2011-17、20-）、JICA 環境社会配慮助言委員会委員（2011-18、20-）、ジェトロ環境社会配慮諮問委員、外務大臣や環境大臣設置の委員など。タイ・チュラロンコーン大学アジア研究所客員研究員（2018 年度）。国際開発学会常任理事（人材育成委員長）、環境アセスメント学会評議員。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	私自身がそうかもしれないと思っている。学士は経済学、修士は MSc、博士は国際協力学。記者（journalism）、NGO（activism）、研究者（academism）を職業とし、政府に批判的な活動をする一方で、政府の委員会に長く関わっている。日本、ラオス、タイ、オーストラリアで活動や研究の経験を持っている。国、職業、政治的立場が異なる文化の間で何かを作り、変えていくことに携わってきた。

氏 名	森村 修 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究 をしています	・現代哲学（現象学・現代フランス哲学）：おもにフッサール現象学ならびにフーコー、ドゥルーズ、デリダを中心とした現代フランス哲学。 ・現代倫理学：「ケアの倫理」を中心とした応用倫理学 ・近代日本哲学：いわゆる「京都学派」を中心とした日本哲学 ・美学・芸術哲学：現代アートを中心としたアート／デザインの哲学・美学
こんな成果 を挙げています	(1) 森村修『ケアの倫理』（大修館書店、2000年） (2) 森村修『ケアの形而上学』（大修館書店、2020年） (3) 森村修「社会政治的トラウマの」の倫理」（牧野英二他編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年） (4) 森村修「アマルティア・セン—自由と正義のアイデア」（榎木玲子/法政大学国際文化学部編『境界を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年） (5) 森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」—〈書〉の美学=感性学〔エステティクス〕の可能性」（東北大学哲学研究室編『思索』所収、2021年）
ほかに、こんなジャンル に関心をもっています	・哲学（西洋・日本哲学など）／倫理学（生命倫理学・環境倫理学・情報倫理学など応用倫理学も含む）、美学（アートの哲学思想など）の専門領域 ・社会哲学・社会思想や政治哲学・政治思想、経済哲学・経済思想などの近隣領域 ・社会福祉・医療／看護／ケアにおける理論的領域
こんな授業 を行なっています	・2022年度の国際文化学部のゼミ（演習）では、「Socially Engaged Art（ソーシャリー・エンゲイジド・アート）」に関わる現代美学・芸術学・美術評論などを扱い、大学院の授業では、日本哲学（特に、九鬼周造「いき」の構造）などを中心に、日本哲学の主要テキストを取り上げてきた。 ・2023年度は学部ゼミでは、精神分析学（フロイトからラカン、さらにはニューロサイコアナリシスなど）を中心に「こころの哲学」に関わる思想を行う予定である。また、大学院のゼミでは、2022年度に引き続き、日本哲学関係のテキストを用いていく予定である。
学会や社会 でこんな活動 をしています	・2023年度で、50周年を迎える「比較思想学会」の理事として活動し、日本の宗教・哲学思想と西洋哲学・思想との比較哲学研究者の育成に関わっている。 ・様々な障がいを抱える人たちとその家族の方々の活動を、アート／デザイン活動に関係づけることを中心に活動している「アートミーツケア学会」に属し、障がいを持つ人たちが過ごしやすい社会を構築するために、哲学・美学・思想的な観点から活動をしている。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	特に思いつきません。